

# 「望郷」の社会心理

高 橋 憲 昭

## 一

### 1 (高橋)

“こきょう”、“ふるさと”という言葉には、一種独特の情感をよび起こさせるものがある。それは“望郷”とか、“郷愁”という言葉に含まれる内容のものであるかも知れぬ。現在、“ふるさと”を思想の対象とすべき時が来たかどうかは別としても、“ふるさと”を思考の対象としてとりあげることではできない。すなわち、“ふるさと”は、われわれにとって普遍的なものなのか、或は、そうでないのか。また、その情感とは何であるか。更には、“ふるさと”と、われわれはどのようなかわりにあるのか。それは、どのような意味をもっているのか。これらのことが考察の対象となる。

最初に、やや繁雑になるが、“故郷”、“ふるさと”という言葉の意味内容をみてみよう。日本国語大辞典(小学館・昭和五十年)によると、ふるさと(古里、故郷)【名】には、次のような意味があるとする。①古くなって荒れはてた所。特に昔、都などがあって、今は衰えている土地。旧都。旧跡。②昔から一族の住んできた土地。また、生まれ育った土地。郷里。こきょう。③昔なじみの場所。かつて通ったり住んだりした土地や家。④宮仕え先などに対して自宅の謙称。⑤女陰の異称。また、故郷に対する外国語としては、英語では、one's (old) home, one's native place, one's home town (village), one's birth place. 独語では、die Heimat, der Geburtsort, das Vaterland. がある。そして“home”に対して、Oxford English Dictionary

は、次のような解説を施している。①村或は町。居住所の集り。農家が集まつてできた村。②居住所。家屋。住家。

家族或は家庭の定着した居宅。家庭の生活と利益。自分自身の家屋。常時生活している居住所。或は、本当の住家とみなしている居住所。時には、ひとまとまりの家族の成員を含むホーム・サークル或は家庭。③いろいろな条件、環境のもとで、それへ対して自然的、本来的に愛着をもち、そして、それと結びつく居住所或は養育の場所。④多様な関連で、墓或は来世へ帰されるもの。"永い"或は"最後の"ホーム。⑤人が、そこへ、本来的に所屬する場所。地方。或は国家。その中では、人の情愛が集中し、或は、保護、休息、満足が見出される。⑥自分自身の故国。生まれた土地。広く、ブリトン人によって、また、英国の植民地の住民によって、そして、以前には、大英帝国に母なる故国、"懐しの故国"に対して、アメリカにおける英国人の子孫によって用いられた。⑦田舎の屋敷。集散の中心。或は土着の住民。物事が、自然のままで、その土地本来のものであり、或は、最も親しみ易い地方或は場所。とある。非常に多義的であるが、日本語にしろ、外国語にしろ、或る言葉の表わす意味内容は、人々の日常生活と深く結びつき、従つてまた、その意味内容の変化や、多様性の生ずる背後

には、時代や社会のありかたの変遷や多様性があることはいうまでもない。

ここで、先ず最初に、"ふるさと"の空間的位置づけを考えることにしよう。現実に人々は、"ふるさと"の空間的位置をどのようにとらえているかをみると、総理府広報室が昭和四九年に、三〇〇〇人を対象として実施した調査によれば、次のような結果がでている。最高位を占めるのは、自分が生まれた所(五六%)で過半数を占める。次が、自分が少年、少女時代に住んだ所(一八%)、現在住んでいる所(一四%)、両親や兄弟達が住んでいる所(一二%)となる。これで見ると、自分が現在住んでいる所(一四%)を除くと、大多数は現在自分が住んでいない所を故郷とみていることがわかる。これは、さきの語義の内容と照合すると興味深い。

ところで、"ふるさと"を考える場合、空間的拡がりと同時に時間的推移の枠を必要とする。先ず、空間的には三つの位置が決定できる。すなわち、「自分が生まれた場所」—B.P.「育った場所」—G.P.「居住する場所」—L.P.である。さらに、これに、時間の推移をかみ合わせると、三者の間の関係が生じる。三者が同じであるか、異っているかの問題である。図示しよう。

甲型  
乙型  
丙型  
丁型

このうち、甲型と丁型は両極端を示す。すなわち、甲型は、生まれ、育ち、居住する場所が同一である。丁型は、逆に、それがすべて異っている。その中間には、生まれ、育った場所は同一であるが、現在住所が異なる場合の乙型と、生まれた場所は異なるが、育った場所と現居住所が同じである場合の丙型が位置する。そして、これらの四ケースのそれぞれの相違は、人々のふるさと観、ふるさと意識の相違となつてあらわれてくることが予想される。

いま、仮に、「ふるさと」を、乙型、丙型、丁型の場合としてとらえたとすると、そこには、人間の移動の事実がある。人々の空間的、地域的移動が基礎的要件となっている。この観点から、ここで、マクロに日本の戦後の人口の地域移動の実態をみよう。戦後の日本の人口変動は三つの段階があるといわれている。第一の段階は終戦後の五年間における人口激増である。人口は約六二〇万人の引揚者と出生ブームによって、五年間に七二〇〇万人から八三〇〇万人へと一一〇〇万人という増加を示し、平均人口増加率は三%に近い高水準であった。第二の段階は、この人口激

増に対する国民的反応として現われた極めて急激な人口コントロールによって特徴づけられる。出生率は、出生ブーム期の三三ないし三四(人口一〇〇〇〇人につき)の高水準から急激な低下を開始し、わずか十年そこそこで、半分の一七に下った。このような文字通り革命的な出生率低下(人口動態革命とよばれる)の過程と重なりあいながら、次の段階があらわれる。第三の段階は、三十年代における日本列島全域にわたる人口の空間的移動である。全国の農村、山村、地方小都市から東海道の太平洋工業・都市化地域に向つて、若い人口を中心とする大移動が始まった時期である。

また、もう少し細かく、この人口移動を地域ブロック別にみると、二つの有力な人口流入地域は、関東と近畿であり、昭和三十年代後半におけるこれらの地域への人口流入は、関東が一七七万人、近畿が九二万人であった。このように、全国的には、人口移動の方向は、東京と大阪を中心とする地域に向つているが、さらにこれは、東日本における東京圏への移動と、西日本における阪神圏への移動という二つの流れに二分される。すなわち、昭和三六年から四十年の五年間に、東京を中心とする一都三県への三七三万人の転入者のうち、七〇%にあたる二六一万人は、中部以

東の東日本からの転入者であり、また、大阪を中心とする阪神圏への転入者二二四万人のうち、七四%を占める一六六万人は西日本からの転入であった。名古屋を中心とする中京圏は、東京圏と阪神圏にはさまれているが、どちらかというと西日本からの流入が若干多くなっている。しかし、この流れを中心にした人口移動も、すでにのべたように、昭和四十年前後よりピークに達し、昭和四三年頃より再び移動が始まったが、それは、大都市圏への流入としてではなく、そこからの流出の動きとしてでてきている。しかも最近の人口移動は、非常に複雑であり、単純な流れとしてはつかみきることができないようである。<sup>③</sup>

以上が、戦後の人口の動きの概略であるが、このマクロ的な数字からは、日本人のどれ程が、“ふるさと”をもつかを推察することは不可能であるが、それを補足する意味で、一、二のデータをあげよう。まず、すでに記した昭和四九年二月に総理府広報室が実施した調査結果によると、現在の居住所と故郷の違う者が五五%を占めている。さらに同じく総理府広報室が、昭和五二年七月に、全国、五〇〇〇人を対象とした調査<sup>④</sup>の中で都市住民二一四二のうち、農村に住んだ経験のある者は、四五%を占め、農村住民一九三四のうち、都市に住んだ経験のある者は三七%となっ

ている。

こうしてみると、おおざっぱではあるが、移動によって半数近くが、乙型、丙型、丁型としての“ふるさと”をもつことになる。

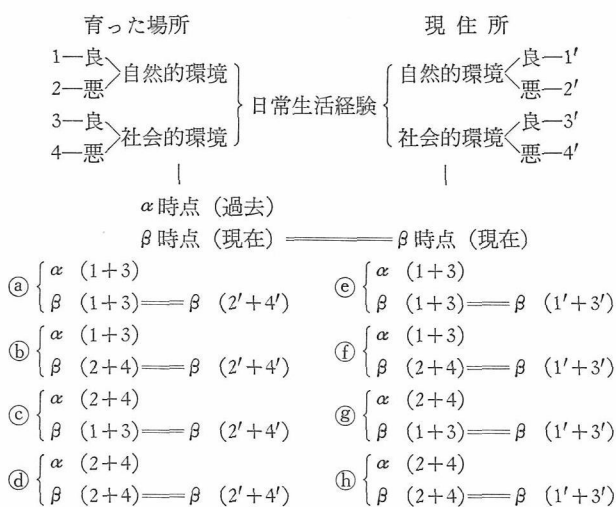
## 二

ところで、それらの人々は、“ふるさと”について、どのような意識や情感をもつであろうか。それは大きく、三つに分けられるように思う。一つは、愛着・受容、二は、嫌悪・拒否、三は、その中間に位置づけられるものである。このうち、愛着・受容と嫌悪・拒否が最大、最小となる場合を類別しよう。ここで、一つの仮説にたって論を進めることにする。それは、人々は、自己の生まれ、育った場所が同一で、しかも現在居住する場所が異なる場合（乙型）に、明確な“ふるさと”意識をもち、特に、育った場所は、“ふるさと”として重要な意味をもつということである。というのは、生まれた場所は、生物的個体としての自分が生まれた場であり、育った場所は、社会的人間としての自分が形成された場所である。しかも自己のアイデンティティーの源はそこにあり、故郷の具体的イメージも、そこに結びつくと考えからである。そういう意味で、故郷とは

“育った場所”と規定しようと思われる。この仮説によって、育った場所と現在居住する場所の条件の相違と時間の推移を組み合わせると、更に、いくつかの仮説的考察が可能である。

すなわち、育った場所(自己が社会化された場所)と現在居住する場所、それぞれの、自然的条件(気候、風土、景觀などの自然環境)と社会的条件(家族関係や地域社会の關係などを中心とする文化環境)の良否、安定、不安定が考慮されねばならない。それらの条件の相違が、“ふるさと”意識に影響を与えると考えられるからである。さらに、そこに時間の推移を加えると次のような図式ができる。

このうち、過去、現在の故郷への志向が最大となるのは、㉔型で、過去の故郷への志向が最大となるのは、㉑型である。また、過去、現在の故郷への志向が最小となるのは、㉒型であり、過去の故郷への志向が最小となるのは㉓型であると思われる。また、これはさらに、帰郷の可能性が残されているか、それとも、遮断されているかによって、影響を受ける。すなわち、帰郷の可能性が遮断されている場合には、㉔型の故郷志向は、極大となるだろう。もう少し具体的に㉔型、㉑型のケースを考えてみよう。育った場所を出て他所で生活する場合、前者の生活が後者のそれに比



べて、自然的、社会的環境が遙かに良好で安定している時、さらに、その上に、再び育った場所へ帰ることが不可能な状況にある時は、故郷を思う気持が極めて大きくなる。たとえば、“じゃがたら文”にあらわされた内容は、このことをよく示している。これに対して、一時的に故郷を離れ、

現在の生活環境が劣悪であっても、将来、故郷へ帰れる可能性がある場合は、故郷志向の質が異なるはずである。また、将来、帰郷し、永住する可能性はなくとも、一時的にしろ、盆、正月或は他の機会に帰郷する頻度の高い場合には、故郷志向の内容は薄められよう<sup>⑥</sup>。

### 三

そこで、次に、現在のわが国の人々の故郷志向の内容を右の仮説的考察の枠組によって、実証的に分析する必要があるが、ここでは、データの関係もあって、とりあげることが困難である。従って、とりあえず、最初に、人々の故郷志向の心理内容は、どのような要素によって構成されているかを、検討することにしよう。サンケイ新聞が、昭和五〇年八月に首都圏と近畿圏で、一〇〇〇人を対象として行った「ふるさと調査」によれば、ふるさとについて、強い愛着を感じる事物として、次のような結果が出ている。年齢によって差異はみられるが、一貫して高いのは、「自然」であり、特に十代の年齢層が高い。十代、六〇代を除いて、第二位を占めるのは「肉親、親類」である。第三位は、三〇代から五〇代までが、「先祖の墓や、寺」、六〇代ではこれが第二位と逆転している。十代では、祭りなどの

行事が第二位、第三位が「肉親、親類」。二〇代では、第三位が「遊び友人」となっている。全体として、「自然」、「肉親、親類」、「先祖の墓や寺」の順となっている。これで見ると、故郷志向の内容を構成するものは、過半数が「自然」であり、次が「肉親、親類」であって、さきにあげたように、故郷の「自然環境」と「社会環境としての家族、親類関係」が、大きい要素となっていることがわかる。

こうして、いま、故郷志向の心理を、望郷心とよぶならば、望郷心は、自然や身近かな社会関係のイメージと結びつくといえそうである。「私の故郷は、高知県の山村で、今はもう人口二千人台になってしまった典型的な過疎の村である。しかし、私の故郷の自然は、私に最高の遊び場を提供してくれた。四季それぞれに特徴のある遊び場であった。……このように私の幼少時代は、故郷の自然が、私の遊び相手であった。今から思うに、この幼少時代に遊びまわった野や山や川が私の真の故郷のように思えてならないのである。」<sup>⑦</sup>このように、野や山や川は、故郷のイメージを構成する。それらは、「そこに住む人間の意識の函数としての自然物であり、意識のパロメーター」であり、「これらの自然物は、子供が大人になるにつれて、その意味を増し、また、その意味を変えていく。」<sup>⑧</sup>のである。また、

社会環境も、同様な意味をもつと思える。たとえば、「私にとつての千駄ヶ谷は、土地としてのふるさとであるよりも、こういう友人達の集い、それこそ、心のふるさといふ意味の方が強い」<sup>⑨</sup>ということにもなる。

このようにみえてくると、概して日本人の故郷イメージは、都市社会よりも、村落社会的内容が強いように考えられる。総理府広報室が、昭和五年七月に実施したさきの調査では、都市居住者二一四二人のうち、農村で生活したいと思う者は、二九%、思わない者、七一%。このうち、農村に住んだ経験のある者は、その四〇%がもう一度、農村で生活したいと思っている。農村生活の経験のない者では、一九%が、農村で生活したいと考える。それに対して、農村居住者一九三四人のうち、都会で生活したいと思う者は、一四%。思わない者は八六%である。このうち、都会生活の経験のある者では、二三%が都会で生活したいと答え、都会生活の経験のない者のうち九%が都会で生活したいと思うのである。この数字によれば、やはり、農村志向が強く、特に、かつて農村で生活し、現在都市で生活する者に、その志向が強いことがわかる。

この傾向は、さらに、すでにあげたサンケイ新聞の調査によつても傍証される。「ふるさと」とすべきところを持

たない者が四四%あったが、その人々に「いま住んでいる所をこどもたちから『ふるさと』とよばれるようにするには、どんなことが必要ですか」を尋ねた結果は、第一位「家族のなごやかさ」五〇%、第二位が「美しい自然」三九%となつてゐる。この点からも、ふるさとイメージの構成要素としての農村社会的特色のウエイトが、理解されよう。

また、故郷志向に関するもう一つの特徴は、次の所にあると思われる。すなわち、既述の昭和四九年二月の総理府広報室の調査は、左のようなデータを示している。現在住んでいる所と故郷とが異なる者が五五%あったが、その人々のうち、故郷に是非住みたい者、七%、できれば住みたい者は二九%、余り住みたたくない者、三六%、住みたたくない者は二二%ある。しかも、高年齢になるほど住みたない数が増すのである。これによれば、五八%もの人々は、実際には、故郷で住みたくなないと考えているのである。残りの三六%の者は、実際に故郷へ帰り住みたいという欲求をもつとともに、望郷心をもつと考えられるが、住みたくないくとする人々の望郷心は、どのようなものであろうか。帰りたいかと思うが故に、望郷心は弱く少ないのか、或は、逆にそうであるが故にこそ郷愁となつて心をかきた

てるのか。これらの点も、改めて考えてみる必要があろう。

#### 四

人間と社会との関係は、今さらのべるまでもなく、半ば自明のことである。人間は社会を離れてありえないし、社会において社会化 socialized されることによって成人となる。いいかえれば、社会化のプロセスを通して、人間はその社会の一般的行為様式としての文化を獲得し、その中で自我を形成する。いわば、彼が育った場における文化は彼の血肉となっている。そういう意味において、彼が育った場所と時間は、本論の最初にも指摘したように、故郷を考える場合に、重要なものであった。

ところで、人間は、常に外への働きかけとともに、内への問いかけを行うものである。もちろん両者は一体不可分で、函数関係にあるが、或る意味では、後者の深まりがあって前者がより生き、また、前者に対する何らかの障害の存在が、後者をより深化する。この内への働きかけは、また、自己のアイデンティティの追求確認の動きとも考えられる。エリクソンの言葉を借りれば、人間は自己のアイデンティティを求めるものである。彼によれば、アイデンティティは、「自分が個人として、同一性と連続性をもつ

ているという意識」としての主體的側面と、「自分の属する社会集団の人々によって認められている自己のあり方」としての客観的側面とによって成り立つと考えられ、幼少年期のさまざまな経験をもとにして、ほぼ青年期に「自分とは、かくある自分だ」(I am what I am.)<sup>⑩</sup> という自己のアイデンティティを確立するといわれる。だが、現代のように、極めて、多元化し、変動の激しい社会にあっては、アイデンティティの確立は、容易でないし、多様な疎外状況にさらされざるを得ない。バーガーらは、近代社会のアイデンティティの根源は、個人の存在にとしての長期的生活設計にあるとし、それは個人の生涯を意味づける中心的役割をもち、社会の包含的意味構造と関連し、個人はそれを通して自分を社会の全体的な意味連関の網の目に結びつけ、こうして、個人は、特定の社会状況における具体的な自我体験を獲得するといふ<sup>⑪</sup>。ここでの、アイデンティティは、エリクソンのアイデンティティの客観的側面と重なるものをもっている。さらに、バーガーらは、近代社会のアイデンティティの特異性のいくつかを指摘するが、その中でも、特に、「異様に未確定」であり、「異様に細分化」されているという特異性が重なる、近代社会のアイデンティティの危機が顕著になるとして、その



原因を社会の複数性と変動性に求めるのである。<sup>12)</sup> このように、個人のアイデンティティーの主観的側面の確認も、その客観的側面の確立によって支えられる所が大きいことを考えれば、現代社会においては、青年のみならず、成人においても、自己のアイデンティティーの確立は容易でなく、常に、アイデンティティーの変貌の危険性にさらされているといえる。しかし、人間は、このような不安定な状態に耐えるものではない。一連の実証的研究を通して、レフ・エレンス・グループの研究を行なったシェリフも、次のように結論づけている。「人間のもつ最も強い衝動の一つは、次のような理由から、他者との安定した確固たる社会的紐帯をつくりあげることである。」すなわち、「安定した社会的紐帯をもつことは、個人が自分自身を独特の属性と中核をもつ『同一の人格』として、日々経験するための必要条件なのである。このような紐帯を欠く場合には、個人は明瞭な自己同一性を確立するうえで大きな困難に遭遇するということ、また、このような紐帯が、いったんでき上ったあとで、失なわれると、個人は疎外感や不安を抱きやすく、従って、とっぴな、一貫性を欠く行動が生じやすいということを示す証拠は、じゅうぶんにある。」<sup>13)</sup>と。

このように、人間は、社会との堅固な連帯の中にこそ自

己のアイデンティティーを確認し、安定を得ることができるのである。だが複数化し、変動が激しい現代社会の中で、移動する人々は、職業生活と結びつくことの多い *association* へも、或は、日常生活の場としての *community* へも、持続的で安定した連帯を保つことが困難となっている。しかも、この上に、多様な疎外条件が加わるならば、なおさらのことであろう。ここに、個人は新しい連帯を模索することになる。このことに関連して、シェリフは、人間は自己の所属する集団が、「成員個人の一貫性や連続性の体験の中核となる確実な依り所でなくなった場合には、個人は、これらの点に関してもっとも有効で、もっと機能的な新しい集団を形成するものである」<sup>14)</sup>とのべている。

ここでシェリフは、集団に連帯し得ない個人は、もっと有効で、機能的な新しい集団を形成するというが、それは手段としての *association* を意味している。しかし、他方において、日常生活の場としての *community* への連帯の再確認の方向は、考えられないであろうか。特に、現代社会の激しい変動と疎外状況の中で、移動経験をもつ人々が、生活の手段としての職場集団へもコミットできず、しかも、それに耐えてゆかねばならぬ状態にある時、家族や、その存在の場としての地域社会を志向することは自然である。

さらにそれさえも不可能な場合には、新しい居住地を他所に求め、或は、自己の自我形成の場としての故郷を志向することが考えられても不思議ではない。

こうして、B.P.、G.P.、I.P.とが同一である甲型や、B.P.は異なるがG.P.、I.P.とが同一である丙型の人間は、時間の軸をさかのぼった自分の社会化の過程と重なる少年期に郷愁を感じ、B.P.とG.P.は同一でI.P.が異なる乙型や、B.P.、G.P.、I.P.がともに異なる丁型の人間は、時間の軸をさかのぼり、しかも、空間の広がりを超えて少年期を過ごした場としての故郷に思いをはせるのであろう。

このようにして、現代社会における故郷志向は、すでにみたように、実際の帰郷欲求を欠如しながらも、望郷、郷愁の情感をともしつつ、単に心理の次元において、自己の根源を再確認しようとするものであり、自己のアイデンティティーを問い直そうとする動きであるといえるのかも知れない。或はまた、故郷は、イメージの中でこそ、生きるものであるのかもしれない。それはまた、時空のへだたりと、差異性の中でこそ、さまざまな情感に彩られながら、あやしく輝くもののようにも思える。<sup>⑤</sup>

## 註

- ① 森崎和江、「伝統と現代」、一九七八年十一月号、七五頁。
- ② この調査は、総理府広報室が昭和四九年二月に、全国満二十歳以上の男女五〇〇〇人を層化二段無作為抽出法で選出し、調査員の面接によって実施したものである。回収率は八二・七%。「世論調査」、総理府広報室、一九七四年五号。
- ③ 黒田俊夫、近代化する人口移動図、毎日新聞、昭和四五年六月二七日号、及び館総、浜英彦、岡崎陽一、「未来の日本人口」、NHKブックス、昭和四五年十一月、参照。
- ④ この調査は、総理府広報室が、昭和五二年七月に、全国満二十歳以上の男女五〇〇〇人を層化二段無作為抽出法で選出し、調査員の面接によって実施したものである。回収率、八一・五%。「世論調査」、総理府広報室、一九七七年十一月号。
- ⑤ この図式は必ずしも完全ではない。たとえば、1、2、3、4と1'、2'、3'、4'の他の組合わせかたがあり、さらに帰郷意欲の有無という条件を加えることもできる。しかし、それは、余りにも繁雑であること。また、本論の目的にとって、今の場合、考慮の外におくことも許されると考えたため省略した。
- ⑥ この調査は、産経新聞が、昭和五十年八月四日に首都圏と近畿圏で、一〇〇〇人を対象として行なったものである。「正論」、臨時増刊、ふるさと信仰、昭和五三年五月、参照。
- ⑦ 田上豊資、「私の故郷」この文章は、「伝統と現代」社の編集部によって集められた自治医大（毎年、入学生の出身地

が全都道府県にまたがっている)の学生の手記の中の一つである。「伝統と現代」、一九七八年十一月号。

- ⑧ 谷川健一、「ふるさと」という妖怪、「伝統と現代」、一九七八年十一月号。

- ⑨ 岡部冬彦、アンケート、私のふるさと、千駄ヶ谷今昔「正論」、臨時増刊、昭和五三年五月号。

- ⑩ E. H. Erikson, "Identity, Psychosocial," International Encyclopedia of Social Sciences, ed. D. L. Sills, Macmillan Co. & Free Press, vol. 7, pp. 61-65. Identity and the Life cycle; p. 82.

- ⑪ P. L. Berger, B. Berger & H. Kellner; The Homeless Mind, Pelican Books, 1977, pp. 70-73.

- ⑫ ibid.; pp. 73-75.

- ⑬ M. Sheriff & C. W. Sheriff; Reference Group, 1964. 重松俊明監訳、「準拠集団」、黎明書房、昭和四三年、二九三頁。

- ⑭ 前掲書、二九四頁。

- ⑮ 紙数の関係上、統計の詳しい表は省略した。出典を参照された。また、「ふるさと」についてのデータや文献は、極めて少ないが、邦語文献として次のものを参照。池田義祐、

「郷土」、社会科学大辞典、鹿島出版会、昭和四三年。白井二尚、「地域社会圏としての故郷と郷土」、哲学研究、第二四二号。

われわれにとって、「ふるさと」とは何かという課題は非常に大きいテーマであって、いわゆる学際的研究の一つの対象となりうるようにも思える。この稿が目的としたものは、「望郷」の心理の内容を、社会状況との関連の中でとらえることであつた。ここでは、わずかに、その一部が、極めて概括的に整理されたにすぎない。しかし、或る意味では、いま私が問題としたかったのは、人々の心の中にある「望郷心」の実感そのものであつたともいえる。けれども「実感」は科学で処理し得ぬものを含み、事柄は容易でないが、その接点の問題は興味深い関心領域の一つである。

(本学教授 社会学)